

# “強迫観念”の名人

永井 豪

(漫画家)

非現実的なストーリーであっても、  
人が持つ“強迫観念”に訴えかければ、  
読み手は物語に引き込まれていく。

漫画界の巨匠・永井豪が、  
スティーヴン・キングが描く「恐怖」について語った。

る人や安心している“モノ”に裏切られる恐怖は、  
計り知れません。

## 手塚治虫先生と観た『シャイニング』

そのキングの原作小説をスタンリー・キューブリック監督が映画化した『シャイニング』を初めて観たのは、尊敬する手塚治虫先生と一緒にアメリカへ行った時のことです。一九八〇年、僕たちは日本の漫画をPRするために、サンディエゴで開催された「コミコン・インターナショナル（通称コミコン）」を訪れていました。そこで、当時話題になっていた『シャイニング』を観ようと、手塚先生が誘ってくださったのです。

スティーヴン・キングは、人が潜在的に持っている“強迫観念”を具現化する名人だと思えます。しかも、誰もが知っている身近な“モノ”を、恐怖を生み出す道具として使います。つまり、人や他の生物から、クルマなどの器物や自然までも、キングは巧みに利用するのです。人が安心感を抱いている“モノ”が突如、牙をむき、主人公などを襲ってくる。信頼してい

映画『シャイニング』は高い評価を受けましたが、内容が原作とかけ離れていたことで、キングはキューブリック監督を批判したと言われています。でも、実際に観たら、とにかく怖かったです。得体の知れない恐怖というか、新しいタイプの映画が出てきたと感じたのを覚えています。まず、斬新なカメラワークに驚かされました。特に衝撃的だったのが、コロラドの深い山の中に建つ「オーバールック・ホテル」へ向かうために、主人公のジャック一家の車が山道を疾走



妻や息子にとって、「信頼する夫や父が、自らを殺そうとする狂気」ほど怖いものはないでしょう。二人はまさに“死”の恐怖と対峙することになるのです。ラストシーンは、ホテルの古い写真のアップで終わります。大昔に亡くなった人々に交じって、主人公のジャックも写っています。ジャックが「死者の世界」に囚われていたことを表現しているようでした。

観終わった後、手塚先生と一緒に食事をしたのですが、先生は原作をすでに読まれていたのですが、小説との違いを綿密に教えてくれました。映画ではホテルの庭に植木で作った巨大な迷路が出てくるけれど、原作に迷路はなく、その代わり植木が生き物のように動くんだとか。あと、ラストも小説と映画では違うんですね。手塚先生と映画について話したあの時間は、今でもとても大切な思い出です。

## 創作する人間として震えあがった映画

映画『ミスト』も好きな作品の一つです。『ミスト』は、スーパーマーケットで買い物をしてきた客たちが、突然閉じ込められるところから物語が始まります。スーパーの外は深い霧に覆

われていて、謎の生物も存在している。次第に犠牲者が出てくるという極限状態の中で、それぞれの人間の奥底に潜む狂気が露わになっていきます。その人間模様が、非常に興味深いと思いました。

映画『ミザリー』も好きな作品です。『ミザリー』は、創作する人間として背筋が凍るような内容でした。大雪の中で事故に遭った人気作家が、運よく助けられて一命をとりとめるのですが、助けた女性がその作家の大ファンで、やがて作家を監禁して様々な要求をするようになります。この女性のファン心理が狂気に満ちていて、本当に怖いと思いました。

スティーヴン・キングにも同じような経験があつてこの作品を書いたようですが、僕もちょっと身につまされました。ファンレターをいただくのはありがたいのですが、「こういう話にしてほしい」とか「この展開は違うだろ」とファンに言われることがよくあるからです。だから、「もし主人公と同じ状況に自分が置かれたら、どうするだろうか」と考えてしまいます。「あんな恐ろしい女性に抵抗するのは怖いから、要求された通りに描いてしまおうかな」とか「いや、作家としてそれじゃダメだろう」とか、いろいろ想像してしまいました（笑）。

している、冒頭の空撮シーンです。全体を俯瞰で撮り、いきなりカメラがスムーズに車へ近づきます。のちに、「ステディカム」という新しいカメラが開発されたことでできた映像と知りましたが……当時は、斬新な映像に驚かされました。一気に映画の中に吸い込まれる感がありました。映画『シャイニング』には、“死”のイメージが溢れています。死は生きる者にとって最も避けたいものではないでしょうか。大量の失血は死に直結するものです。その血が、エレベーターのドアを破らんばかりに噴き出します。まるで「血の滝」のようでした。

「キューブリックは、ホロコーストを連想させたかったのだ」と分析した映画作家もいたようです。大量の血は、多くの人の死を連想させます。

入浴中の美女が次第に腐乱していくのも、恐ろしいイメージでした。“死”そのものだからです。

ジャック・ニコルソン演じるジャックが、次第に狂気に見舞われていく様子も非常に怖かったですね。「ホテル閉鎖の日」から始まって、「火曜日」「土曜日」「月曜日」と曜日のチャプターが出るのも、少しずつ不安が増大していくように恐ろしいと感じました。